

別記
第3号様式

京都府教育委員会教育長 様

令和8年3月12日

コミュニティ名 Team 学びの侍 in KYOTANGO
代表者所属名 京丹後市立丹後小学校
代表者職・氏名 小幡 聖一

京都府若手教職員学び合いのコミュニティ育成支援事業報告書

次のとおり報告します。

1 コミュニティ名

Team 学びの侍 in KYOTANGO

2 研究テーマ

子ども達による主体的、対話的で深い学びへとつなげる探究的な授業づくり

3 研究の目的

探究プロセス（課題の設定、情報の収集、整理分析、まとめ表現）を意識した授業づくりを深く理解し、児童の実態に応じて実践していくと同時に、実践交流を通して研究内容を広く普及し、京丹後市の子ども達がより主体的、対話的で深く学ぶことができるようにする。

4 研究の成果と課題

<成果>

【児童の姿から】

○児童の主体性の向上

「学びの手引き」や「学習計画表」を導入したことで、児童が自ら見通しを持ち、自分のペースや方法で学習を進める姿（個別最適な学び）が見られるようになった。

○対話の質の向上

探究プロセス（情報収集・整理分析）において、自分の考えの根拠を明確にし、他者と協働しながら考えを深め合う姿が増えた。

○自己調整力の芽生え

「ルーブリック」を活用することで、児童自身が”今の自分の現在地”を客観的に把握し、次の学習に向けて振り返り、調整する力が育ってきた。

【教師の指導観の転換】

○「教え込み」から「伴走者」への意識転換

探究的な授業デザインを共有したことで、教師が「どう教えるか」ではなく、「どう学習環境を整えるか（仕掛けづくり）」に注力できるようになった。

○心理的安全性のある学び合いの場の構築

月一回のオンライン研修や集合型の研修を通して、学校の枠を超えた教員同士のネットワークができ、日々の悩みを共有、解決できる環境が機能した。

<課題>

【児童の学びを深めるための課題】

△自己調整が苦手な児童への伴走支援

「自由度」が上がった分学習計画を立てたり、情報を整理したりすることに難しさを感じる児童に対して、どのような手立てや足場掛けを行うことができるかを考える必要がある。

△探究の深まりの追及

単なる「調べ学習」で終わらせず、各教科の見方、考え方をより鋭く働かせ、児童から新たな問いが連続して生まれるように単元構想のブラッシュアップが必要である。

【教職員・コミュニティとしての課題】

△教材研究・準備の負担軽減

「学びの手引き」や「ルーブリック」の作成には時間がかかるため、これらを持ち寄り、共有・蓄積しているデータベース化を進められると、より業務の効率化を図れるのではないかと。

△実践の普及

コミュニティ内で培った実践や熱量を、参加者個人のクラス内にとどめず、それぞれの所属校、学園等での研修にどのように還元・波及させていくかを具体的に考えていく必要がある。

5 研究成果の波及方法

今後も実践交流を定期的に行い、構成員の所属する学校や学園、所属する研究組織で研究実践を広めていく。

6 研究（活動）実績*

年月	研究（活動）内容（具体的に記載）	活動場所
毎月第一火曜日	実践レポート報告、交流	各校オンライン
令和7年6月 1日	集合型 研修	京丹後市立峰山小学校
令和7年7月31日	集合型 研修	アグリセンター大宮
令和8年1月27日	先進校視察*リーディングDX研究校	東大阪市立布施小学校
令和8年1月30日	若手コミュニティ成果報告会	京都府総合教育センター

7 予算執行状況

- (1) 旅費は、旅費執行状況報告書に記載のとおり
- (2) 図書については、受領書のとおり

8 他校へ勧めたい実践又は他校へ呼びかけたい共同研究（できるだけ具体的に）

テーマ	
育てたい資質能力	<p>○主体的に学ぶ力（課題発見力） 自ら課題を見つけ、一人ひとりが課題を「自分ごと」として捉えながら、主体的に探究に向かう力</p> <p>○自己調整力 振り返りを生かして自分の課題や「学び方」を見つめ直し、他者からも学んで、よりよく生かそうとする力</p> <p>○個別最適・協働的に学ぶ力 課題解決に向けて自分に合う学び方を自己決定して実践する力（個別最適な学び）と、安心・安全な環境下で他者と意見や考えを出し合い、対話する力（協働的な学び）</p> <p>○情報を整理・分析し、言語化・表現する力 教科書や資料から情報を読み取って取捨選択・関連付け（整理・分析）を行い、各教科の見方・考え方を意識しながら自分の考えを書きまとめ、表現する力。</p>

実践 又は 研究 の 具 体 的 内 容	<p>「学びの手引き」や探究プロセスの提示といった環境設定を通して、子どもたちが自律的に学びを進め、他者と対話しながら深く考えることができる「自立した学習者」へと成長すること</p> <p>1. 研究方法（若手コミュニティとしての活動内容）</p> <p>①毎月のオンライン型研修会：各教科における「探究サイクル」を意識した授業の実践報告や交流を実施した。具体的には、「学びの手引き」の作り方、ループリックの活用、振り返りの視点と評価、探究授業における困り事や悩み事などを共有・協議した。</p> <p>②集合型研修会：夏季休業中の自主的な集合研修や、リーディングDX研究校（東大阪市立布施小学校）への先進校視察を実施。</p> <p>2. 授業実践の具体的内容（教師の環境設定と指導）</p> <p>探究プロセスを意識し、児童が主体的・対話的に学べるよう、以下のような授業デザインやツール（手立て）を活用。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●単元構想・デザインの工夫：中心概念的知識の獲得と単元ゴールを創意工夫した単元構想を作成する。 ●学びの手引きと目標設定：「学びの手引き」を作成・提示するとともに、授業実践において「学び方」の目標設定や振り返りの視点の共有を行う。 ●多様なツールの活用：ゴール課題の設定、ループリック、自分の学習計画に考察や結果を書き込めるシート（高学年理科など）を活用し、探究過程を意識した学びのまとめや振り返りを促す。 <p>3. 探究プロセスに沿った学習活動の展開 実際の授業では、以下の4つの探究プロセスを児童の学習活動として位置づける。</p> <p>①【課題との出会い】：仮説・予想を立て、検証していく見通しをもたせる。</p> <p>②【情報収集の視点】：課題解決に必要な情報を言語化させる。（各教科の「見方」を意識）。</p> <p>③【整理分析】：課題解決に必要な考え方（考え方の技法）を用い、得た情報を取捨選択したり関連付けたりさせる（各教科の「考え方」を意識）。</p> <p>④【まとめ表現】：課題に対する自分の考えを書きまとめ、表現させる。</p>
--	--